

[ライブ・サーティ]

Live30

<http://www.omichikai.or.jp>

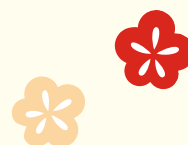
VOL.

202

2014年
1月-2月



(表紙写真は午年生まれの職員)



TOP MESSAGE

ごあいさつ 大道道大 (社会医療法人 大道会 理事長)

CLOSE UP

ボバース記念病院のキャリアアップへの取り組み
クリニカルラダーシステムを導入

OMICHI ACADEMY

第17回大阪病院学会

NPO法人 日本リハビリテーション看護学会第25回学術大会

OMICHI SCRAMBLE

新入職者フォローアップ研修

INFORMATION

大阪市重症心身障がい児者等医療型短期入所の取り組み



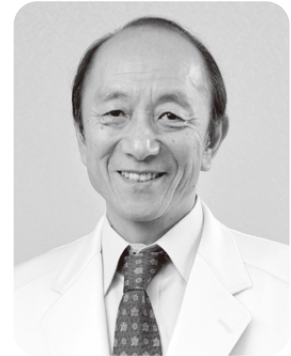
最優秀賞
「Live30」
施設全体の研修活動を通じて
最も優秀であったことを認め、
日本一を贈ります。
日本医療協会



ごあいさつ

時代の要請に応え、時に先行する形で歩んだ60年。
 今後も私たちの能力を最大限に
 発揮していきます。

社会医療法人 大道会 理事長
 森之宮病院 院長
大道 道大



平成26年は大道医院開設60周年にあたります。開院した昭和29年に私も生まれました。中学生の一時期、病院に下宿し、夜勤の看護師さんに起こしてもらって通学していたことが思い出されます。その時、24時間、機能する病院の姿を知りました。

この60年を俯瞰すると、日本の医療の縮図が見えてきます。大道医院の後身・大道病院が開院した昭和32年頃は大阪市東・南部に病院がほとんどなく、多くの患者さんが当院に来院されました。昭和57年には、「リハビリは患者さんが住み慣れた環境に近い場所で行うべき」との信念に基づき、かつてない都市型リハビリ病院としてボバース記念病院が開院。そして、私が大道病院院長に就任した平成2年頃は病院に高い専門性が求められていました。難題でしたが人間ドックや人工透析のクリニック、訪問看護ステーション、介護老人保健施設等の開設に取り組み、時代の要請に応じてきました。

日本の医療は技術も制度も世界に類を見

ない良い環境にあり、医療人は骨身を惜しまず現場を支えています。このスタイルには非効率的な側面もありますが、良さは継承すべきです。近い将来、医療法や介護保険制度が改定されます。加えて、今後の疾病構造や人口動態等も勘案しながら私たちは進むべき方向を見定めなければなりません。

医療は人材が要ですが、優秀な医師といえども一人で治療は出来ません。能力ある個人が結集してこそ、より高度な医療が実現します。1980年代以降、当大道会を牽引する事務職員の充実ぶりも実感されます。平成18年に開院した森之宮病院は昨年、病院機能評価を更新。3領域同時認定は特筆すべきことでした。近年、継続している人材育成プログラムも成果をあげています。そうした能力と来るべき時代のニーズをマッチさせるべく意識を高め、地域医療の担い手として一層、サービスの質の向上をめざしてまいります。



平成18年に開院した森之宮病院



昭和39年に大道病院の第1期新館が完成



昭和32年に総合病院としてスタートした大道病院



昭和29年に開院した大道医院

ボバース記念病院の
キャリアアップへの取り組み

クリニカルラダー システムを導入

育成と評価によって段階的に
レベルアップ
課題、目標を持ち、看護のスペシャ
リストを目指して欲しい

ボバース記念病院の理念・看護理念から「地域の方々に貢献できる看護とは何か」「より質の高い看護・思いやりのある安全な看護を実践するには」また、具体的には「入院生活行動援助に対してどのような看護提供を行えばいいのか」を考え、科長・主任会で検討した結果、平成23年度からクリニカルラダーシステムの構築にむけて取り組んできました。

クリニカルラダーとは、専門知識や技術を段階的に身につけるように計画したシステムであり、看護師それぞれのモチベーションも高めることができると考えます。

そこで平成23年度には、クリニカルラダーⅠ(リハビリテーション初級看護)・クリニカルラダーⅡ(リハビリテーション看護中級)・クリニカルラダーⅢ(リハビリテーション看護上級)の段階でシムアップを図るようにしました。



笠松明美科長

■クリニカルラダーⅡ-1の評価会の風景



緊張気味な筆記試験の様子



排泄介助場面の様子



筆記試験、実技による評価票

クリニカルラダーⅠ(リハビリテーション初級看護)では、ベースとなるリハビリテーション看護の基礎研修部分を習得します。急性期から回復期・維持期へのリハビリテーション看護の知識と実技研修を行い、どの程度、理解できているのかを把握するために、独自の評価会を実施しました。看護師それぞれの理解レベルを確認しつつ、アドバイスをや助言のコメントを記入した評価票も作成しました。

クリニカルラダーⅡ(リハビリテーション看護中級)は、1・2・3とカテゴリ別化し、平成24年度には、ボバース記念病院勤務3年目以上の看護師を対象に、クリニカルラダーⅡ-1として高次脳機能障害・てんかん・排泄看護・トイレ場面の介助法について講習会・実技研修を実施しました。平成25年には、その評価会を10月2日・19日・11月2日の3回に分けて行いました。目標は、患者の身体能

力レベルに応じた援助ができることとし、脳血管障害・排泄障害と看護についての筆記試験、実技試験は、身体的機能障害レベルのタイプ別の患者を設定(排泄場面)して実施しました。

スタッフは試験に備えて自己学習をしたりスタッフ同士で確認し合ったりしてました。また、試験当日は、早めに来てシミュレーションしながら練習をしている姿を見かけました。試験場面では、緊張感から日常的に行っている援助ではありますが、躊躇してしまうことや、必要以上のエネルギーを消費し、汗を流すスタッフもいました。そうした一生懸命に前向きに取り組む姿に大いにプライドを感じました。

評価会に至るまでの過程は、筆記試験は科長主任会で何度も検討、日常的な看護援助として必要な知識と理解を中心としたものとし、実技試験では、評価者によって評価の相違や偏りがなく公平にな

るようにルール化、工夫として写真入りで評価ポイントを示しました。また、評価会後のアンケート調査では、「日常の看護の振り返りとなった」、「自身の看護について考え、課題を表出することができた」などの意見がありました。

平成26年は、クリニカルラダーⅡ-2としての講習会・実技研修の計画を立てています。ひとりでも多くの看護師が、クリニカルラダーシステムを契機として、どんな看護をめざし、どんな看護を提供したいのか、自分の描く看護師像や将来像に近づけられるように支援していきます。さらに、自院でのスペシャリストもしくは認定看護師をめざす看護師を育成します。共通の認識と目標を持って常にブラッシュアップを怠らないようにスタッフへの研修環境づくりをこれからも行っていくと考えています。

(ボバース記念病院看護部3階病棟科長 笠松明美)

発表報告

第17回 大阪病院学会



森之宮病院
リハビリテーション部
作業療法科主任
三浦 教一

参加者との交流を通して

多様な視点を持つ重要性を実感

日程：10月20日

場所：大阪市・大阪国際会議場

大阪病院学会は大阪で唯一、多職種が集まって行われる学会であり、今回は様々な職種から300もの演題が登録されました。本学会のテーマは「大阪の医療介護の進化」、シンポジウムのテーマは「終末期医療のあり方における医療・介護の連携」でした。

私自身は昨年度まで一般病棟に所属していたため、終末期の方に対してリハビリテーションをしていた経験がありますが、どのようにしたら自分が役に立っているのか、何かもつとできることはないのかと自問自答を繰り返しながら関わっていました。

今回、シンポジウムを拝聴し、私の印象に残ったキーワードは「自己決定 (living wild)」です。現代医療は「待つこと」ができないため、何かあると積極的にすぐに対処療法的な治療をしてしましますが、本当に必要な治療なのかをしっかりと考える必要があるとシンポジウムの長尾和宏先生(長尾クリニック院長)は述べられました。ここでいう治療とは医師の治療のことですが、私自身が行うリハビリに置き換えても、つい何かしないといけないという強迫観念にとらわれて、自分の治療を押し付けていたこともあつ

たのではないかと感じました。そうならないためには、本当に受診者がしたいことは何かをしつかりと引き出し、自分がどのように関わることが受診者にとって必要なかをもつと考えていく必要があると考えます。しかし、本人が本当にしたいことを引き出すことはとても難しいため、まずはしつかりとした信頼関係を築くことや、相手の本音を引き出すやりとりができるようになることが必要になると、シンポジウムの山口育子先生(NPO法人ささえあい医療人権センター)COML理事長は言われました。そしてさらに、信頼関係を築いていくためには、「障害を受容することはとても大変なこと」で感情が揺れ動くのは当然であり、その揺れ動く感情に寄り添っていくことが大切とお話しになり、印象に残りました。

また、私自身は、「組織の目標と個人の目標とをすり合わせた面談に向けて」というタイトルで発表させて頂きました。主任を拝命して以来、ずっと科員との面談を実施しており、科員がより働きやすくなるように自分自身でコーチングなどを学んできましたが、なかなか業務の中で結果が伴いませんでした。

そのような中、マネージメント研修によって、他部署の管理職の方と面談について検討する機会を得、組織の目標と個人の目標のバランスをとることが必要だと気付きました。それを活かして面談の変更を行い、面談を受けた科員にどう感じたかをアンケートを取ってさらに面談内容の検討を重ねたという一連の取り組みを報告させて頂きました。

座長の先生からは、「科員にアンケートをどのように取ったか」、「その科員は素直に話すことができていたか」という

ご質問を頂き、上司がアンケートをとることの難しさを感じていましたが、もつと科員からの意見を反映させるためには、安心してアンケートに答えられる工夫が必要だったと感じました。

また、発表終了後にも、いくつかの病棟の管理職の先生と面談についてお話し、面談や目標設定について議論することができ、とても参考になりました。なかでも、「管理職側の評価の基準を明確にすることで、科員が方向性を持ちやすくなる」というご意見に共感できましたが、私たちの職種は数値化できないことも多く、今後、検討が必要だと感じました。

今回は多職種が集ったことで、様々な発表を聞かせて頂くことができました。日常の業務では意識しないことも多く、もつと自分自身、広い視点をもつて仕事をしていく必要性を感じる事ができました。今後とも様々な視点から物事を捉え、的確な判断ができるように研鑽していきたいと思います。

発表報告

第17回 大阪病院学会



グリーンライフ
療養サービス部
療養1科
山原 史裕

認知症への理解をさらに深め
業務上の課題に活かしたい

日程：10月20日

場所：大阪市・大阪国際会議場

今回は、医師を中心に看護師セラピストなど、様々な職種が集まり、シンポジウム・セミナー・演題発表が行われました。私自身も、「チームで関わりなが

ら在宅復帰した一症例」という演題で発表させて頂きました。

セミナーでは、浅香山病院認知症疾患センター長の繁信和恵先生の「認知症の疾患別ケア」を聴講しました。セミナー内容は認知症の特異的な型を4つに分類し、それらの疾患別の特徴や対応策を話されました。このセミナーを通して、認知症を認知機能の障害と捉える事の大切さを学びました。レビー小体型認知症の方は幻視やパーキンソンニズム等を呈するだけでなく、よく嚥下機能が障害されるとのことでした。様々な臨床的な症候を知ること、対応策が生まれたり注意して観察を行ったりできると思います。また私たちの施設では、高次脳機能障害の検査を適切に行うことで症状の原因を絞りやすくし、なおかつそれに応じた対応策やリハビリテーションプログラムを立案する事が可能となるように感じました。今後も勉強会などに参加しながら認知症への理解をさらに深めていきたいと考えています。

私の演題発表では、他病院や座長の先生方から質問を受け、改めてカンファレンスなどを通じた情報共有の重要性や、シームレスな援助の必要性を実感しました。今後は、業務の中で職種間での情報共有を少しでもシステム化できるように検討していきたいです。また、当施設から転所や在宅復帰される方々が、引き続き安心しての援助が受けられるようにどういった申し送りが必要なのかも考えていきたいと思っています。



第17回 大阪病院学会



森之宮クリニック
診療技術部
竹内亜希子

「PET/CTにおける看護師の 被曝の実態調査」を発表し 自身の学びの機会になりました

日程：10月20日
場所：大阪市・大阪国際会議場

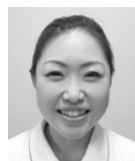
今回は、「PET/CTにおける看護師の被曝の実態調査」を発表させて頂きました。本学会の参加者は病院に勤められている全職種の方々と、どの発表も患者やその家族との関わり、医療や介護を改善していきたいという思いから生まれる現場の生の声であり、日々の努力だと感じました。専門分野の学会が多いなか、このような多種多様な内容を学べる学会に参加することは、PET/CTに関わる看護師の仕事を理解してもらうチャンスと思い、施設紹介も兼ねた発表をしました。

受診者への放射性薬剤の投与、線源となる受診者の介助など、看護師が担う仕事には必ず被曝を伴います。どのような介助で、どの程度の被曝を伴うかを、行動別に記録した内容を実態調査として発表しました。

私自身は看護師15年目ですが、RIに携わってからはまだ3年です。奥深いRIの分野にはまだ知らないことが多々ありますが、この発表を通して基礎から改めて学びきっかけを頂いたように感じています。今回の取り組みは実態調査に終わりましたが、これを基にいくつかの課題も見出せました。方法を検討し、距離の取り方、時間のかけ方を工夫

し、どのように必要な看護をしつかり提供すべきかを日々検証しています。今後も専門性を持った看護の展開に取り組みたいと思っています。

NPO法人日本リハビリ テーション看護学会 第25回学術大会



ボハース記念病院
看護部2階病棟主任
湯川智子

当院から2題を発表 その成果を今後につなげたい

日程：10月25日～26日
場所：千葉市・幕張メッセ国際会議場

NPO法人 日本リハビリテーション看護学会に参加しました。メインテーマは、「未来を拓くつなぐ・紡ぐ・リハビリテーション看護」であり、当院から2題、新卒2年目の看護師を中心に発表を行うことができました。一般病棟から「早期離床を促すための一考察」離床アセスメントシートを使用して「回復期病棟から「浮腫軽減に向けての取り組み」担当セラピストと連携して「患者のQOL向上を目指して」と、それぞれ、病棟の特性を生かした研究内容でした。

研究実施中は討議を繰り返し、協働し研究を進めたことでよりよい成果が現れ、研究をまとめることができましたと感じます。発表当日は緊張でいっぱいでしたが堂々と発表を行うことができ、質疑応答にも適切な回答ができていました。大会で発表した経験は看護師としての自信につながると感じます。

今年度は、教育プログラムの見直しをし、2年目研修で1年間かけて看護研究についての研修を数回に分けて行い、

3年目になってから実際に研究をしてもらう計画にしています。次年度の看護研究の内容がよりよい充実した研究になるように、研究した内容を研究の場で終わらせず、継続更新していかねければなりません。そして、その先を見越した指導ができるように私自身も頑張っていきたいと思っています。



発表メンバー
2階病棟(左から益岡愛
田江理江科員)



発表メンバー
3階病棟(左から石井綾香科員、
山内麻由美科員、遠江明美科員)

NPO法人日本リハビリ テーション看護学会 第25回学術大会



森之宮病院看護部
4階東病棟
友定幸恵

ADL介助の倫理的課題を学び ケア方法を見直す契機に

日程：10月25日～26日
場所：千葉市・幕張メッセ国際会議場

「転倒の要因と複数回転倒する患者の特徴についての一考察」として研究発表を行いました。発表は、病棟での転倒対策の課題や、効果を再度認識する機会になりました。

また、ワークショップに参加し、ADL援助に伴う倫理的課題について、千葉大学大学院看護学研究科の酒井郁子先生より講義を受けました。酒井先生は、「ADL介助はとてつもない権利を踏み込んでしまう」とし、リハビリ病棟で侵されやすい日常倫理として、安楽に暮らすこと(寝る権利、休む権利)、信頼のもとのコミュニケーション(例えば患者に伝えてもどうせ分らないという考え)などを上げておられました。また、ケアを提供することは、自分の存在と時間を相手の為に使う「ケアしたい」という気持ちがあればただの自己犠牲に過ぎないと講義されました。

この講義を踏まえ、逸脱した倫理や患者さんへの対応に関してグループワークを行いました。「夜間、寝られるようにと日中長い時間車椅子に乗車させてしまう」「服の選択を患者に委ねず、看護師が決めてしまう」などが挙がりました。普段何気なく行っているケア方法が、一歩間違えると患者の尊厳を侵している、改めて振り返る機会になりました。

私たちも、時間内のケアに当てはまらない患者さんを煙たく思ってしまう心がないとは言えないと思います。その心をどのように置き換え、ケアに取り組んでいくか。個々の気持ちや心の余裕が必要だと感じました。今後活かしていきたいと思っています。



友定科員の発表風景

受講報告

平成25年度
第66回全職種研修会



森之宮病院
リハビリテーション部
理学療法科主任
藤井 崇典

多職種との意見交換が
現場の課題解決に有効と実感

日程：10月19日～20日
場所：東京都・三田NNホール

今回、回復期リハビリテーション病棟における「退院支援」というテーマで、全職種研修会に参加させて頂きました。当研修会には全国32か所の病院から専門職が120名参加されました。

第1日目に聴講した講演Ⅰは、「我が国の高齢者人口推移状況と回復期リハビリテーション病棟の役割」。回復期リハビリテーション病棟協会常任理事の、やわたメディカルセンター病院副院長、西村一志先生が高齢者の人口推移と介護保険、入院医療の国際比較、「寝たきり」の発生過程、退院後のリハ的支援体制などの項目で講演されました。その中で、日本は病床数に対する医師、看護師、セラピスト数が少なく、ケア不足で機能が良い人も臥床傾向に陥りやすい状態が廃用症候群を助長する一因であることを学びました。在宅復帰率は2008年以降75%を超えておらず、地域との連携を密に復帰率を上げることが大切だと締めくくられました。

講演Ⅱは、回復期リハビリテーション病棟協会会長である当院の宮井一郎院長代理が、「回復期リハ病棟におけるプロセス」を見直せばワンランクアップ」というテーマで講演。入院から退院

までのケアプロセスを、入院患者受け入れ、多職種の専門性の発揮、多職種チームによる回復期リハ・ケアの実践、急性疾患への対応・合併症管理・再発予防、退院計画の5つに分け、全国の現状と改善ポイントを解説しました。現在、地域の経験が少なく在宅復帰後を知らない療法士も多いという話があり、在宅復帰後を知る事で回りハ介入の質を向上する必要があると指摘しました。今後、脳卒中再発や老老介護などの困難事例も増えることが予想され、在院日数の短縮や在宅復帰率向上のためにも、多職種によるチームアプローチを成熟させた、よりよい退院支援が必要とのことでした。

同日、実施されたワークショップでは、他病院の多職種の方々と職種別の専門性や医療的な立場から意見交換したほか、斬新な設備や取り組みを知ることができて、大変有意義でした。

今回の研修を通して、よりよい退院支援のために多職種で意見を出し合っ具体策を検討することや、入院早期から退院をめざした介入を今まで以上に意識し、科員への教育、指導を行う必要があると実感しました。

受講報告

平成25年度下期
昇進者研修会



ボハース記念病院
診療技術部薬剤科主任
佐久間 備子

励ましと新たな目標を得た研修
主任としてさらに努力を重ねます

日程：11月20日
場所：森之宮病院8階会議室
講師：天野常務理事

主任として2ヶ月近くが経過し、「役職名負けしているのではないか」とか、「自分自身、前向きに変化した点はあるか」など、不安が尽きない状態でした。この研修にこのタイミングで参加することができ、明日からの道標が見えてきたような感触をもちました。

大道会という職場は、人間関係はもとより、非常に恵まれた環境であるということに改めて気づかされました。また、現在の医療業界が厳しいものだとも把握していました。赤十字経営病院がそれほど多く存在しているとは思いませんでした。命に係わる業種、医療業のサービス業のひとつです。やはり医療の質のみではなく、経営面も健康的でなければ真の良いい病院とはいえません。大道会は健全な経営基盤のもと、社会医療法人としての使命を遂行する非常に信頼のおける職場なのです。この場所で主任として働くことができることに感謝したいです。

また、主任としてうまくいくコツ「自分の役割の1つか2つ上の視点に立つことを心がける」という具体的なポイントを教えてくださいました。これはとてもわかりやすく、私に求められていることがイメージしやすいです。今まではあまり意識しなかったポイントだったので、明日から早速、実践したいと思います。

「能力の差は小、努力の差は大」。社会人になってから、またそれ以前も含め、これまでの道のりを振り返ると、私は明らかに能力ではなく努力で苦難を乗り越えてきたと思います。この言葉を研修で知ったことは私の自信となり、今後進んでいく勇氣にもなりました。主任という立場に任命されたことを自信に、よりよい職場作りに貢献したいと思います。

受講報告

平成25年度下期
昇進者研修会



在宅事業部
ケアプランセンター
東成おおみちセンター長
片山 治子

現場のニーズを反映し
利用者にも有用な組織作りを

日程：11月20日
場所：森之宮病院8階会議室
講師：天野常務理事

①地動説の重要性：「社会のニーズに的確に対応しない組織は生き残り更に発展はしない」。プロダクトアウトからマーケットインへのお話は、まさに介護分野に問われていることだと思えます。周囲を見渡すと、「マーケットイン」を推し進めている法人は、戦略的に事業を展開し、確実に顧客を確保しているように思います。我々は地域に出て、社会のニーズを最も実感できる「現場」にいます。政策の動向と合わせ、現場のニーズを把握、分析し、それを上司を通じて組織に伝えることも管理職の重要な役目であることを、改めて認識しました。様々なところでアンテナを張り、利用者にとって何が一番良いのかを基本に置きながら、組織はどうあるべきかについても考えていきたいと思えました。

②管理職に求められる使命、役割：管理者は部下の掌握育成、業務推進のほかに上司補佐という重要な役割もあることを再認識でき、「100求められたら105返す」意識を持つという学びは、いつも返すことで精一杯である自分を反省するよい機会となりました。能力的にまだまだ至らない状況ですが、最大限の努力をしていきたいと思えます。

新入職員フォローアップ研修会を開催しました

平成25年11月30日に新入職員フォローアップ研修会を開催し、平成25年度新入職員65名が受講しました。まず天野常務理事より、医療業界の現状や大道会の位置づけについて講義がありました。医療業界の知識をさらに深めることができ勉強になったようです。

次の「社会人基礎力」についての講義は、マネジメント力強化研修トレーナーの森之宮病院看護部柴田科長、リハ部砂古口科長が担当しました。社会人として必要最低限の能力や日常業務の「報・連・相」につ

いてなど実践型の内容で、業務の迷いを解消するヒントになったとの声が聞かれました。最後に外部講師の方より「フイーリング・アーツ」体感をさせて頂き、音楽と絵を鑑賞してリラクセスできるひとときとなりました。

懇親会では「同期は一生もの」という井山管理部長の言葉を受け、職種・施設を超えた交流の場となり、大変盛り上がりしました。1年目職員は研修での学びを実践に生かし、今後も同期とのつながりを大切に日々の業務に邁進して

れることと期待します。
(本部署管理課 稲持百瑛)



天野常務理事の講義内容は日々の業務に通じる研修内容であり、参加者は熱心にメモを取っていました

柴田・砂古口トレーナーの講義。活発な質疑応答が行われました

頑張っている職員に注目!

ただ今、奮闘中

#43



グリーンライフ療養サービス部

張思夢 科員
孫偉 科員

平成25年9月から、グリーンライフ療養サービス部2科、3科に中国人看護留学生として、張思夢(チョウシム)さん(写真左)、孫偉(ソンイ)さん(写真右)が入職しました。午前中は学生として日本語学校に通い、午後からはグリーンライフ職員として大変多忙ではありますが日々、頑張ってくれています。入職当初は会話のやり取りや環境の違いなどで緊張し、戸惑うこともあったと思いますが、今では立派な職員となり、私たちの大切な仲間として利用者様からも大変信頼されています。日本語でのやり取りにまだ不慣れな点もありますが、日々の成果が表れ、以前よりスムーズな会話ができるようになったと思います。利用者様の表情もよく観察しており、不安そうにされている方には、「どうされましたか?」などと積極的に声掛けをして利用者様の訴えを受け止め、傾聴されています。今後の目標は2年間で日本語一級検定に合格し、日本での看護師資格取得をめざすことです。彼女たちが将来、素晴らしい看護師となることを信じて、精一杯応援したいと思います。(グリーンライフ療養サービス部療養2科主任 上田正)

「クリスマス会」

森之宮病院

平成25年12月18日(水)、森之宮病院では、入院患者さん向けの鑑賞会を1階こもれび広場で開催しました。今回は扇町総合高校ブラスバンド部「OHGIES」の皆さんによるクリスマスコンサートです。飾り付けされてクリスマスの雰囲気たっぷりの中、全10曲が演奏されました。「クリスマスメロデー」に始まり、迫力あるサウンドの「宇宙船艦ヤマト」や昨年、話題となった「NHKあまちゃんのオープニングテーマ」などが披露され、会場は「かわいかったよー!」の声援と手拍子で沸きました。参加した約120名の入院患者さんは、口ずさんだり、リズムを取ったりと楽しい時間を過ごされたようでした。(森之宮病院診療技術部薬剤科 山崎良子)



ボバース記念病院

12月18日、ボバース記念病院の1Fリハビリテーション室にてクリスマス会が行われました。前座は看護部のスタッフによるハンドベル演奏で「雪やこんこん」、「きよこの夜」を披露しました。続いて、西村アコースティックバンドの3名の方をお招きしたクリスマスライブを開催、「贈る言葉」や「上を向いて歩こう」、「クリスマスイヴ」などの名曲や西村アコースティックバンドさんのオリジナルソングも歌って頂き、患者さんも一緒に口ずさんだりセラピストの方も肩を組んで盛り上がり、とても楽しい時間を過ごすことができました。(ボバース記念病院事務部フロントサービス課 生田美香)



大阪市重症心身障がい児者等 医療型短期入所の取り組み



ボバース記念病院では平成25年4月から、大阪市重症心身障がい児者等医療型短期入所という事業を開始しました。在宅で生活されている重度障がい者のご家族が、何らかの理由で一時的に介護をすることが難しくなった場合、数日間の入所をして頂けるというものです。対象となる方には、「大阪市内の方」「原則15歳以上」「定められた障がいの状態である方」など、いくつかの条件があります。医療相談室が利用申し

込みの窓口です。

相談者はご家族をはじめ、地域で障がい者を支援されている事業所の方など、多岐にわたります。その相談の中から、5名の方が短期入所の利用を開始されています。重度の障がいをもたれている為、ボバース記念病院で普段受け入れている患者さんとケア方法が異なる場合も多く、利用相談時から医師や看護師とも協議を重ね、利用者のご家族が安心して入所生活を送って頂けるように心がけています。また、病室でじっと過ごして頂くだけでは満足度は上が



短期入所時にご利用頂く病棟の個室

いと考え、利用中にリハビリテーションを受けて頂くなど、サービス内容の充実も検討しています。

短期入所事業について詳しく知りたい、実際に利用を考えたいなど、どんなことでも、医療相談室までお問い合わせ頂ければと思います。
(ボバース記念病院診療部医療社会事業課主任 奥田寛之)

中国で出版『新Bobath治療学』

中国では脳卒中後遺症をもつ方たちへのボバースアプローチに高い関心が寄せられています。しかし、中国国内では関連の本がきわめて少ないため、今回、北京の中国リハビリテーション研究センターの李建軍所長とボバース記念病院の古澤正道名誉

副院長(PT)が編者になり、平成25年10月に待望の書が中国語で北京の人民軍医出版社から出版されました。

内容は、評価、治療の神経生理学的理論、正常運動、そして歩行、上肢手機能、日常生活動作、摂食嚥下障害への対応など16章で構成されて

います。

中国にボバースアプローチが普及し、中枢神経疾患患者さんへ質の高い治療が提供されるための一助となることが期待されます。

(ボバース記念病院リハビリテーション部理学療法科 藤田良樹)

フィリピン台風義援金に協力しました

平成25年11月8日、台風30号によってフィリピン中部では甚大な被害がでました。被災された皆様には謹んでお見舞い申し上げます。

一般社団法人日本病院会(大道大副会長)では医療復興を目的とした義援金を募集しており、このたび

大道会でも募金活動を実施しました。職員ひとりひとりの善意により総額411,589円が集まりましたので日本病院会にお送りしました。

被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

(森之宮病院事務部主任 川谷真紀)

ご寄付を頂きました

永山美代子様(大阪市旭区)よりご寄付を頂きました。ありがとうございます。ご意思に活用させて頂きます。

Live30【ライブ・サーティー】 2014年1-2月号 vol.202 (隔月発行)

編集発行人/社会医療法人 大道会
〒536-0023 大阪市城東区東中浜 1-5-1
TEL.06(6962)9621 FAX.06(6963)2233

■大道会

社会医療法人大道会本部
T EL 06(6962)9621
森之宮病院
T EL 06(6969)0111
ボバース記念病院
T EL 06(6962)3131
森之宮クリニック(PET画像診断センター)
T EL 06(6981)9600
帝国ホテルクリニック(人間ドック)
T EL 06(6881)4000
大道クリニック(人工透析)
T EL 06(6961)5151

介護老人保健施設グリーンライフ
T EL 06(6965)0666
訪問看護ステーションおおみち
T EL 06(6967)1123
訪問看護ステーションおおみち森之宮営業所
T EL 06(6942)3737
訪問看護ステーション東成おおみち
T EL 06(6977)8680
ケアプランセンター城東おおみち
T EL 06(6964)5285
ケアプランセンター東成おおみち
T EL 06(4259)5311
レンタルケアおおみち
T EL 06(6967)6250

特別養護老人ホームサンローズオオサカ
T EL 06(6974)7388
東成山水学園(保育園)
T EL 06(6974)7377

●パソコン <http://www.omichikai.or.jp>
●携帯 <http://www.omichikai.or.jp/i.cgi>

バーコードを読み取っていただく、大道会の携帯サイトにアクセスできます。



編集後記

インフルエンザウィルスやノロウィルスによる感染症が流行していますね。子供や高齢者などが感染すると重症化する恐れもありますから、一人ひとりが「かからない」「うつさない」対策を実践したいものです。これらの感染症の予防方法で共通している重要なものはやはり手洗いです。爪は普段から短く切っておき、手洗いの際は時計や指輪は外すほうが良いようです。外出先からの帰宅時や調理の前後、食事前などには、こまめに流水で石けんを使って手を洗うようにしましょう。
(広報推進委員/本部管理部 曾我部雄一)